

平成30年度劇場・音楽堂等機能強化推進事業  
(地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)

成果報告書

団 体 名	公益財団法人北海道演劇財団	
施 設 名	扇谷記念スタジオ・シアターZ00	
助成対象活動名	公演事業・人材育成事業・普及啓発事業	
内定額（総額）	8,501	（千円）
公 演 事 業	5,599	（千円）
人材養成事業	1,498	（千円）
普及啓発事業	1,404	（千円）

(2) 平成30年度実施事業一覧

【公演事業】					
番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	劇のたまご 「ぐりぐりグリム第二章～ シンデレラ」	5月25日～27日	脚色・演出・音楽：斎藤歩 出演：櫻井幸絵、熊木志保、 西田薫、横尾寛、櫻井ヒロ	目標値	350
		シアターZ00		実績値	224
2	劇団青羽 「そうじゃないのに」 (韓国)	8月4日～5日	作：イ・ミギョン 演出：キム・カンボ 出演：ユン・サンファ ほか4人(総5人)	目標値	140
		シアターZ00		実績値	173
3	劇のたまご 「ぐりぐりグリム第三章～ おかしな森の赤ずきん」	11月2日～4日	脚色・演出：清水友陽 出演：すがの公、熊木志保 ほか3人(総5人)	目標値	350
		シアターZ00		実績値	347
4	劇作家育成公演 プロトバスプア 「春のめざめ」	11月22日～25日	演出・脚色：小佐部明広 出演：高橋寿樹、中村雷太 ほか8人(総10人)	目標値	400
		シアターZ00		実績値	377
5	劇作家育成公演 劇団・木製ボイジャー14号 「ローゼンクランツ とギルデンスターン は死んだ」	12月13日～16日	演出・脚色：前田透 出演：安藤友樹、井上嵩之 ほか14人(総16人)	目標値	400
		シアターZ00		実績値	359
6	劇作家育成公演 RED KING CRAB 「ガラスの動物園」	11月14日～18日	演出・脚色：竹原圭一 出演：木山正太、原子千穂子 ほか2人(総4人)	目標値	400
		シアターZ00		実績値	312
7	バリアフリー対応	5月23日～27日	劇のたまご 「ぐりぐりグリム第二章～ シンデレラ」	目標値	
		シアターZ00		実績値	
8	多言語対応	11月2日～4日	劇のたまご 「ぐりぐりグリム第三章～ おかしな森の赤ずきん」	目標値	
		シアターZ00		実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
平成30年度の目標値、実績値				目標値	2,040
				実績値	1,792

(2) 平成30年度実施事業一覧

【人材養成事業】					
番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	シアターZ00ラボ2018	5月28日、10月10日	講師：佐藤信、串田和美	目標値	90
		シアターZ00 札幌文化芸術劇場		実績値	167
2	劇作家を育てる リーディング	9月20日、10月9日、 10月15日	演出・クリティック： 櫻井幸絵、清水友陽、斎藤歩	目標値	60
		シアターZ00		実績値	55
3	演劇人を育てる スキルアップレッスン	5月8日・9日、 8月6日・7日、 1月15日・16日	講師：福士恵二、高田恵篤、 キム・カンボ、 ユン・サンファ、斎藤歩	目標値	70
		シアターZ00 スタジオ1		実績値	107
4	酪農学園大学学生劇団 「宴夢」への創作 スキルアップ講座	4月24日～26日 7月28日～30日	講師：櫻井幸絵 講師アシスタント：熊木志保	目標値	90
		酪農学園大学		実績値	70
5	地域のワークショップ リーダー育成講座	4月27日～2月11日	講師：斎藤歩、清水友陽 講師アシスタント： 納屋真大、西田薫	目標値	60
		シアターZ00		実績値	90
6	こぐま座「パペット ユースクール」 への講師派遣	5月29日～2月2日	講師：斎藤歩、清水友陽、 磯貝圭子 講師アシスタント：熊木志保	目標値	90
		こぐま座 中島児童会館		実績値	71
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
平成30年度の目標値、実績値				目標値	460
				実績値	560

(2) 平成30年度実施事業一覧

【普及啓発事業】					
番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	発達障がいの子どものためのバックステージツアーとワークショップ	4月18日～5月15日	講師：斎藤歩 アシスタント講師：清水友陽、磯貝圭子	目標値	40
		スタジオ1		実績値	29
2	中学演劇部のための創作ワークショップ	7月7日～8月11日	講師：畑澤聖悟 アシスタント講師：清水友陽、山本（南ヶ丘中学）ほか1人	目標値	300
		北辰中学校 コンカリーニョ		実績値	351
3	高校生のための演劇で世界を考えるディスカッションとリーディング「ハンナとハンナ」	1月12日～14日	講師：イトウワカナ、斎藤歩、中山夏織	目標値	160
		シアター ワークショップ		実績値	28
4	高校演劇部のための創作ワークショップ	8月18日～9月16日	講師：磯貝圭子 アシスタント講師：前田透、小佐部明広	目標値	50
		琴似工業高等学校		実績値	54
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
平成30年度の目標値、実績値				目標値	550
				実績値	462

## 【妥当性】

### 自己評価

社会的役割（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。

扇谷記念スタジオ・シアターZ00は、地域の団体や劇場と連携し、札幌劇場祭、札幌演劇シーズン、演劇創造都市札幌プロジェクトを提案し、独自の活動で、北海道の演劇シーンを牽引してきました。特に観客増に劇場の枠を超えて札幌全体で取り組んだ結果が現れ始めています。年2回の演劇シーズンを楽しむ観客が1万5千名を超え、その数が増え続けています。その結果、今、札幌ではコンテンツの不足が現れ始め、次世代劇作家・演出家の育成が急務となっています。2017年より劇場運営を芸術監督制とし、芸術監督とプロデューサーが新たなミッションとビジョンを短・長期に展望し、事業を組み立てています。当劇場は、スタジオ（稽古場）を併設していることが大きな特徴で、「劇場」を演劇創造や地域社会のために活動・研究・人材を育成する拠点となるべく「創造型劇場」「地域密着型劇場」という旗を掲げました。2018年度は、「創造型劇場」として若手劇作家に海外有名戯曲を創作・上演する機会と場を提供することを通じて育成を図るとともに、「創造型劇場」の在り方と演劇の次世代ビジョンを研究・提言する場を提供し、若手演劇人の目標となる劇場を目指す事業を組み立てました。「地域密着型劇場」としては、未就学児童から大人までの多様な世代と多言語の取り組みで地域に暮らす外国人も観劇できる演劇作品の創造、発達障がいをもつ子どもたちと舞台美術を製作する演劇を通じた社会的包摂事業に取り組んだほか、近隣のこぐま座のパペットユーススクールをはじめ、演劇に取り組む中学生・高校生・大学生への創作ワークショップを通じた演劇の普及・啓発活動、若手演劇人を対象としたスキルアップレッスンやワークショップリーダーの育成など、人材育成事業を実施しました。新体制2年目で、まだ地域の認知・信頼の確立を図っている段階ではありますが、短期計画にそった内容で事業を実施できたと考えます。

助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。

事業全体を通じ、劇場が、地域の演劇の質の向上（文化的側面）、演劇による地域の共生社会の形成（社会的側面）、劇場における専門家の雇用や観光産業との連携（経済的側面）に寄与し、豊かな地域社会に不可欠な場所として認知されることを目標としています。札幌は、国内の他地域とは異なる独特の都市であり、他とは異なる役割が演劇には求められています。民間の劇場が複数存在する中で、当劇場は「演劇」の中核的な存在としての役割を求められていて、その評価が3年前に斎藤歩が芸術監督に着任して以来、更に高まっています。これまで、若い才能が北海道に定着しないという状況が続いていましたが、近年の様々な努力により、札幌が一つの舞台芸術の防波堤の役割を果たし始めています。札幌劇場祭や、札幌演劇シーズンの盛り上がりなどで、札幌で創って外へ発信しようとする若い世代が増えています。そんな札幌における質的にも中核劇場としての役割を果たすために、豊かな創造環境と、高い批評性と検証能力、充実したサポート体制と中央とのパイプを若い世代に提供することが、現在の当劇場に求められていると考えます。一方で、演劇人の能力を地域社会に役立て、地域経済にも寄与できるプログラムが必要で、公演事業と人材育成事業、普及啓発事業を連携させて、事業全体を有機的に絡み合わせて組み立てることを意識しています。その継続性を担保するのが、母体となっている公益財団法人北海道演劇財団が2016年度に策定した中期計画の存在です。「この5力年で次世代に引き継ぐことのできる公益財団法人の骨格を形成する」ための様々な改革を行い、3年が経過した今、すでに多くの改革が果実を結び、次の中期計画に向けた議論も始まっています。公益財団法人における民間有識者により組織された理事会・評議員会での厳しいチェックを経た、責任ある点検と実施で、文化的、社会的、経済的意義が継続して認められると考えます。

## 【有効性】

### 自己評価

目標を達成したか。

創造型劇場		地域密着型劇場
<ul style="list-style-type: none"> <li>・観客数のさらなる増加・創客</li> <li>・専門家の不足</li> <li>・観光資源としての地位の確立・周知</li> <li>・市民・企業・行政のサポート充実</li> </ul>	課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークショップリーダーの不足</li> <li>・地域における劇場の役割の認識不足</li> <li>・社会的包摂の取り組みの経験と蓄積</li> <li>・演劇以外の芸術・経済分野との協働</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・北海道演劇における 先端品質というブランド化</li> <li>・次世代の劇作家・演出家の育成</li> <li>・若手演劇人にとって目標となる劇場</li> <li>・観光資源としての地域確立</li> <li>・劇場の次世代ビジョンを 研究・提言する広場</li> </ul>	ミッション	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークショップリーダーの育成</li> <li>・高齢者施設・児童会館へのアウトリーチ</li> <li>・高齢者・子ども・子育て向けの プログラムの充実</li> <li>・近隣住民が参加できるボランティア 組織の充実</li> <li>・近隣他分野劇場との連携</li> </ul>

「地域密着型劇場」として子ども・子育て世代向けの事業に積極的に取り組みました。アートで療育をサポートする「ペンギアート」との協働で舞台美術を製作し初演した＜劇のたまご＞シリーズの「シンデレラ」では、2019年に札幌演劇シーズン初のキッズプログラムに選定され、札幌文化芸術劇場hitaruでの再演が決まり、障がいをもつ子どもが健常児とともに舞台美術製作に取り組むほか、札幌市子ども未来局と連携して地域の特別養護施設の子どもたちにも観劇の機会を提供することも実現します。「ぐりぐりグリム第三章～おかしな森の赤ずきん」では、多言語公演（英語字幕）に取り組み、外国の子どもたちが一緒に演劇を鑑賞する場を提供しました。

「創造型劇場」として専門家、特に劇作家の育成に取り組んでいますが、海外戯曲を芸術監督が選び、若手劇作家3名が、札幌劇場祭2018（参加32団体）に参加しました。若手が海外の近現代演劇に果敢に取り組んだことが評価され、RED KING CRAB「ガラスの動物園」は特別賞と俳優賞を受賞しました。「演劇人を育てるスキルアップレッスン」では福士恵二氏、高田恵篤氏などを講師として身体性のワークショップを、「シアターZOOラボ2018」では佐藤信氏（座・高円寺）と串田和美氏（まつもと市民芸術館）を講師に地域の劇場を考えるレクチャーを実施し、若手演劇人、公共施設職員など幅広い参加があり、新聞にも大きく取り上げられました。こうした取り組みのほか、日常的に芸術監督が直接若い世代と触れ合う機会が増えたことで、劇場の利用層が20代にも広がりつつあります。

「公演」「人材育成」「普及啓発」の各事業を有機的に組み合わせ、地域の演劇の質の向上、演劇による地域の共生社会の形成という目標には有効だった一方、劇場における専門家の雇用や観光産業との連携という面では目に見えた成果を得るまでには至っていません。

## 【効率性】

### 自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。  
アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

「公演事業」では、6事業のうち劇作家育成公演を含む3作品を「札幌劇場祭」（10月30日～12月2日／観客数10,098人）に合わせて、国際交流事業作品を「札幌演劇シーズン2018－夏」（7月20日～8月27日／観客数8,552人）に合わせて公演しました。公演時期を地域の大きな演劇イベントに合わせたことで、広く事業を告知でき、観客増につながったと考えます。一方、子どもと子育て・家族世代を対象とした1作品を5月に実施したところ、運動会時期と重なり、観客数にも影響がありました。今後、学校事業や子どものスケジュールなどの把握が必要です。収益目標の達成率は95.3%、支出は助成対象経費の変更率－1.3%と、ほぼ当初予算を遂行できました。

「人材育成事業」「普及啓発事業」は、劇場内で実施する場合はより多くの人材が参加できるような長期的・定期的なスパンで計画し、アウトリーチの場合は相手が必要とする内容や時期を相談しながら実施しています。時期・期間については適切だったと考えます。ただし、人材育成事業「シアターZ00ラボ」の講師に予定していた石橋蓮司氏のスケジュールが合わず3回開催のところ2回とし、普及啓発事業「高校生のための演劇で世界を考えるワークショップ」を冬休みに設定したところインフルエンザの流行で参加者が減り、事業の規模を縮小せざるをえなくなりました。「人材育成事業」の収益目標の達成率は、「シアターZ00ラボ」で著名な演劇人を講師としたため参加者が増えて170.8%、支出は「シアターZ00ラボ」の回数を変更したため助成対象経費の変更率－7.6%となり、当初予算より収益率を上げる結果となりました。「普及啓発事業」の収益目標の達成率は102.5%、支出は1事業の規模縮小にともない助成対象経費の変更率－19.5%となりましたが、ほぼ当初予算を遂行できました。全体としては、収支予算としては適正だと考えますが、今後「公演事業」の収益率を上げ、より安定した運営を目指します。

## 【創造性】

### 自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

2017年度より運営体制をそれまでの幹事制から芸術監督制へと変えました。初代芸術監督の齋藤歩は、2000年より東京での俳優・演出家の仕事を開始する一方、札幌でも2001年からTPSチーフディレクターとして活動、2016年に札幌に移住して、現在は北海道演劇財団の専務理事・芸術監督です。齋藤が着任したことで、東京や他地域の演劇人とのパイプが強固になり、これまで札幌に招くことが難しかった佐藤信氏や串田和美氏を招くことが可能になったり、札幌の若手演劇人の目標でもある齋藤が劇場にほぼ常駐し、若手を直接指導するレクチャーやワークショップが増えたことで、若い演劇人たちが劇場事務所やスタジオに集まるようになりました。上演作品や事業の質の向上とともに、社会的包摂事業などのアイデアも集まり始め、地域社会の細かいニーズにも応えられるようになっていきます。

プロデューサーには韓国で長年、演劇と日韓交流事業に従事していた木村典子を起用し、国際交流事業と多言語（字幕）事業を推進しています。劇場のフランチャイズ団体である札幌座の公演や、劇場企画公演「劇のたまご」で多言語字幕を提供し、今後の地域の経済活動に重要な役割を果たすとされているアートツーリズムの動きを演劇にも取り込む試みをおこなっています。韓国の劇団・青羽のキム・カンボ氏との継続的な交流による果実として2018年夏には「そうじゃないのに」（韓国）と「象じゃないのに」（日本）の日韓演出家による同時期上演も実現したことや、劇場で創作した「raprap」というアイヌ・韓国・日本の多民族によるパフォーマンスが札幌国際芸術祭に招聘され、2018年にはロシアのハバロフスクに招かれ、公演を行ったことも、木村の存在なしには実現できませんでした。

当劇場では、提携公演として、札幌で活動している団体のほか、道外、海外の団体を対象に提携公演を募集し、芸術監督とプロデューサーが審査し、年間8～10作品を公演しています。良質な作品を市民に提供するとともに、道外・海外の団体にとっては他地域で公演できる機会となっています。その長年のキャリアで国内外に数多くのパイプを持つ齋藤と木村が着任して以来、札幌市内の民間劇場では並べることのできなかつたラインナップを地方都市で実現できるようになり始めています。

フランチャイズ劇団・札幌座の存在も、当劇場の創造性を高めている一つの要因です。2001年の開館以来、フランチャイズ劇団として稽古場スタジオを使用した創造と、公演をおこなっている札幌座は、民間でありながらも、パブリックな役割を帯びた札幌の中核演劇創造集団として、専属メンバーのほか、道内外の他劇団で活動する人も参加し多様な演劇人たちと世界の名作や現代劇、北海道を描く創作劇を上演していますが、劇場が「創造型劇場」として掲げるミッションのひとつ「北海道演劇における先端品質というブランド化」を体現しています。劇場企画の「劇のたまご」の出演者やスタッフ、演出家の多くが札幌座の座員でもあり、アウトリーチプログラムのワークショップ講師の多くも札幌座の座員です。多くの人材が出入りするオープンな創造集団である札幌座が劇場のフランチャイズ劇団であることが、当劇場の強みでもあります。当劇場はスタジオ1とスタジオ2を併設しています。スタジオ1（稽古場）は、芸術監督制への移行とともに、稽古場の確保が物理的に経済的に難しい若手劇団に開放し、稽古や道具作りを行えるようにするなど、劇場とスタジオを有機的に連動させているのも特徴です。

これらの特徴的な要素を重ね合わせ、2021年に20周年を迎えようとしている当劇場は、90席という小さな劇場ならではの至近距離で味わうことのできる表現と、稽古場スペースを併設している特徴を武器に、公演事業と人材育成事業、そして普及啓発事業を連動させ、重層的な取り組みを継続してゆきたいと考えています。

## 【創造性】

### 自己評価

地域の実演芸術の振興など、地域の文化芸術の発展につながっていた（と認められる）か。

芸術監督制への移行にともない、事業の参加者や観客、地域で活動する創造団体や文化団体、行政担当者などと劇場運営責任者が、日常的に話をする機会が増加しています。運営主体の意志の在処が明確になったことで、札幌市・北海道などの文化担当部局担当者が頻りに訪れるようになったり、テレビ局などのメディアの取材が明らかに増加しています。北海道や札幌市の文化政策を審議する審議会への出席や、地域の民間放送局での番組審議員などを任せられ、地域で活動する様々なジャンルの人材と意見交換をする機会も増えています。

地域の文化を議論する場との距離が近い人材が芸術監督とプロデューサーを務め、劇場事業の公益性や、ミッションとの整合性、劇場の施設・技術・人材・ノウハウの質を点検・検討をし、実行しています。

昨年、札幌に新しく誕生した公立劇場・札幌文化芸術劇場hitaruの開館にあたっては、開館記念事業のいくつかについて芸術監督やプロデューサーが依頼を受け、事業の提案や、運営のサポートを行い、当劇場に蓄積したノウハウやアイデア、人材の提供を行い、地域の文化芸術の振興に寄与しました。hitaruクリエイティブスタジオのオープニングで公演した「ゴドーを待ちながら」は芸術監督が招いた舞台美術家・島次郎さんが斬新な舞台美術をデザインし、当劇場で俳優の新体制についてのワークショップを行った高田恵篤・福士恵二、そして斎藤歩が出演し、2,000名を超える観客を集め成功しました。そのリハーサルの多くは当劇場のスタジオ1で行われ、札幌の公立拠点劇場の誕生を支えることができました。

このように、当劇場に集まる人材が、札幌の舞台芸術の先端を担っているという実績が、内外に浸透しています。

公演事業だけでなく、アウトリーチプログラムのコミュニケーション能力向上のためのワークショップも増加しています。札幌市内だけでなく、札幌以外の市町村からもアウトリーチプログラムの依頼があり、オホーツク紋別市の社会福祉協議会からは、通年でコミュニケーションワークショップの講師派遣の委託を受け、講師を派遣して、演劇による地域活性化や地域の青少年の健全育成に、当劇場のノウハウを役立ててもらっています。

外部からの評価・点検も継続的、定期的に行っています。

多様な人材が集まる観客組織であり、演劇によるコミュニティ活動を推進するNPO法人札幌座くらぶ（約70人）などの外部モニターとの交流の場「シアターZOOサロン」をほぼ毎月、劇場スタジオで開催し、交流を重ね、地域の演劇の質の向上（文化的側面）、演劇による地域の共生社会の形成（社会的側面）、劇場における専門家の雇用や観光産業との連携（経済的側面）が推進できているかを点検しています。

ホームページに最新の公演情報や劇場スケジュール、劇場設備やアクセス、劇場の沿革などを掲載し、更新も頻繁に行っており、札幌市内の劇団の皆さんも、ホームページから劇場の新しい情報を入手しているようです。Facebookや、TwitterによるSNSによる情報発信も頻繁に行っています。劇場専門のアカウントから、ほぼ毎日発信を続けていて、Twitterのフォロワー数は現在1,898名です。

若い世代に対する情報発信と同時に、パソコンやスマートフォンの扱いに不慣れな世代への発信も郵送によるダイレクトメールによる劇場通信「ステージニュース」や公演情報の発行を定期的に行っているほか、スタジオ1における「歌声健康教室」の開催など、地域で暮らす独居老人も劇場に出入りする取り組みも行っていますが、エレベーターのない地下一階というロケーションのため、足に不安のある高齢者にとって近寄りやすい劇場であるという側面をどう克服するか。バリアフリーが課題でもあります。

## 【持続性】

### 自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展した（と認められる）か。

扇谷記念スタジオ・シアターZ00の運営主体である北海道演劇財団は、2016年に新体制を発足して「中期事業計画（5か年計画）」を立案し、2017年に改革を実行し、運営・組織・財政の見直しを図りました。特に予算規模と事業規模を再検討し組織バランスの整備を行うことが大きな課題であり、劇場も地域の文化拠点としての役割と規模に検討が加えられました。

2018年度に3年目を迎えた改革ですが、今後を見据え、現在マスコミや民間企業の代表で構成されている理事会に、創造の現場で活動する芸術監督よりも一世代若い演劇人を新たに理事（演出家・俳優3人）として迎え、第三者的視点をもつ外部の人材と直接創造に関わる人材が業務執行の決定を行う体制に切り替え、組織の強化と活動の持続的発展を図る決定をしました。劇場運営においても、新理事と彼らが代表を務める劇団の人材をキャリアパスに組み込み、劇場のプログラムを立案し、運営・管理する次世代の専門家の育成に着手しています。

また経営・財政面の脆弱さが指摘され続けてきましたが、新体制のもと予算規模と事業規模、正規雇用者の数などの組織バランスを5か年計画に沿った形で見直し、質の高い事業を実施し、人的資材を集中させることで、コストパフォーマンスも上がり、実施3年目にして好転、安定した運営と維持のための基盤を構築できました。一方で協賛社数・後援会員数が、前年比3.4%減となり、営業力の強化が課題として浮上しています。

このほか、2018年に開館した札幌市民交流プラザの札幌文化芸術劇場hitaruで人材育成事業「シアターZ00ラボ」を共催で開催し、また北海道演劇財団がオープニング事業「ゴドーを待ちながら」を企画・制作したことで、市民にとって有益な事業を通じた劇場同士のネットワークの形成が始まりました。横浜若葉町ウォーフ、青森渡辺源四郎商店など、道外の劇場との提携も始まっています。